

-

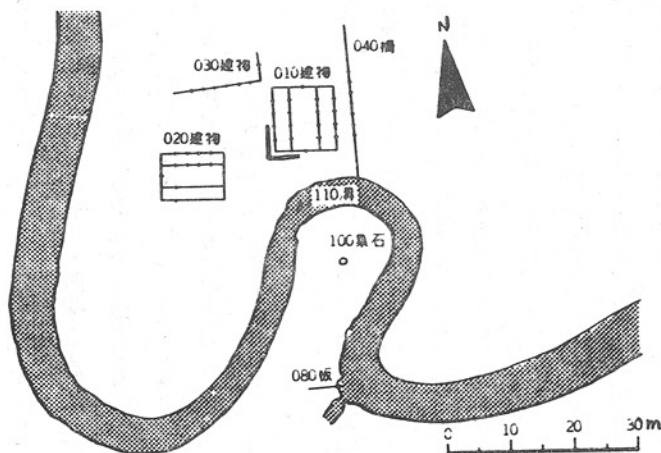
出口にほど近く、そこから約の山麓のゆるい傾斜面上にあり、遺跡付近の標高は八〇〜九〇mである。勸行寺川とよばれる幅五mほどの小河川の北側に遺跡が立地する。上流側(東側)を穴田地区、下流側(西側)を石仏地区と称し、両者は約三〇〇m離れている。これらの遺跡の北方約五〇〇mに式内

当遺跡に関する遺構・遺物として、一九六二年に、田直し作業中に古代の銅銭や土器が発見されたが、一九七〇年には高瀬圃場整備事業に伴う工事中に柱穴・柱根・土器片が発見されたので、一九七一年四月から六月にかけて発掘調査が行われた。

調査の結果、石仏地区（延べ七六〇㎡）からは掘立柱建物三棟、柵

一条、蛇行する自然
流路一条、打入板三
カ所、集石遺構、土
坑若干が検出された。
建物は西に開くコの
字状の配列をなすと
考えられ、主屋は五
間×四間の南北棟建
物SB〇一〇で、そ
の西に四間×五間の
東西棟建物SB〇二
〇があり、いずれも
二面庇で床張りの堂
々とした建物である。
主屋の北には西・北

遺構略図



遺構略図

端未検出の東西六間以上、南北一間以上の建物SB〇三〇がある。

SB〇三〇はSB〇二〇とは棟方向が平行にならず著しく西で南にふれる。両者は同一計画のもとに建てられたのではない可能性があるが、柱掘形・雨落溝などの出土遺物から平安前期の同時期の遺構で、重複しない単一時期の建物群である。柱根は自然消滅したと考えられるもののほかはすべて遺存している。この建物群の西と南を限る形で幅約3m、深さ約1mの自然流路が検出された(SD〇九〇・〇九一・一一〇・一二〇)。流路の下底に砂利が薄く堆積し、上半には暗褐色の粘質土が堆積している。この上半部の埋土から柱・板など多量の加工木材とともに木簡が出土した。中心建物に近い部分では特に多くの遺物が投入されており、建物跡の柱根の遺存状況とも考え合わせると、この遺構が短期間に廃絶したことを示している。

一方、穴田地区で検出された遺構は、掘立柱建物四棟、柱列五条、礎板列一条、溝二条などである。建物四棟は石仏地区のものに比して小規模で規則性に乏しいが、建て替えが想定できる。溝は幅約1m、深さは現状で〇・三m(本来1mぐらいか)で、規模・埋土からみて石仏地区の溝につながるものかもしれない。土坑から出土した遺物は生活用品が多く、建物の性格として石仏地区に比して住居的色彩が濃い。时期的には石仏・穴田両地区の遺構は同一時期に並存していたと考えられる。

遺物は、土師器・黒色土器・須恵器・縄文土器・古式土師器・青

磁・瀬戸焼などで、須恵器の年代は平安前期に位置づけられる。土器以外では石仏地区の溝から漆器片・瓦塔片・曲物・浄瓶などが出土している。漆器と関連して穴田地区の土坑から漆が付着した土器も出土しており、漆工人の存在が想定される。なお銅銭として一九六二年に発見されたもの(和同開珎一枚・神功開宝四枚・隆平永宝二枚、調査時に表採されたもの(万年通宝一枚・神功開宝一枚)が注目される。

墨書土器では、穴田地区の表採のものに「家成」と記すものがあり、「越中国官倉納穀交替帳」(『平安遺文』一一二〇四号)で大同三年(八〇八)・天長四年(八二七)に砺波郡擬主政としてみえる「中臣家成」との関係が注目されているが、同一人物であるとの確証はない。ほかに穴田地区の溝・柱抜取穴・土坑などから、「衣^{〔万呂カ〕}」「衣^{〔万呂カ〕}」「南^{〔万呂カ〕}」「丸」など人名を記すと思われるものが出土している。「衣」と記すものには内面に墨が付着しており、硯として使用されたものであろう。なおこのほか転用硯が数点出土している。いずれも時期は平安前期のものである。

当遺跡の性格は、石仏地区の建物群がコの字状の配列をなし、主屋と南の付属建物が二面庇付きで官衙的であること、しかしその規模が郡衙より小さいことなどから荘家跡とみて、具体的には弘仁六年(八一五)の「東大寺請納文」(『平安遺文』一一四〇・四一四号)の杵名蛭庄(ただし抹消)との関係が指摘されている。しかし一方では遺跡

の北、高瀬神社の東側に「勸学院」の地名があることも注目され、『延喜式』大学寮にみえる大学寮勸学田との関係を想定することもできる。また遺跡所在地の字名が「大宮司」であることも考慮して、高麗山勸学院という寺号をもつ高瀬神社の神宮寺との関係も検討されねばならない。

なお当遺跡は一九七二年に国史跡に指定され、石仏地区は一九七三～四年度に整備されて、掘立柱建物三棟・川跡が復原され、資料館が併設されている。

8 木簡の积文・内容

(1) 「昔右支^{〔篤カ〕}□易曹上人^{〔須カ〕}□難

(8.0)×(8)×6 0.19

石仏地区SD一一〇溝出土。右辺が欠け、下部は切損している。上端と左辺は調整加工しており、原型は短冊型であろう。文字は一面のみやや細字で書かれており、その書風は端正な都ぶりである。書風からみて平安中期を下らないとみられる。文意は不明であるが、漢詩の一句かもしれない。材は木目の細かな檜材である。

この木簡と同じ材質のものがもう一片同じ溝から出土しているが(1.8)×(3)×4、それには墨書は認められない。両者は直接つながらないかもしれないが同一個体であったと判断される。

9 関係文献

富山県教育委員会『富山県埋蔵文化財調査報告』Ⅲ(一九七四年)

阿部義平「富山県井波町穴田遺跡の調査」『日本歴史』二七九 一
九七一年

(櫛木謙周)